総合教育研究センター
学生向け情報誌
クレードル
第 10 号

CRADLE

Center for Research And Development of Liberal arts Education
10th issue

森に生きる！ 永尾学長

2016 年 8 月 8 日、多忙なスケジュールの合間を縫って「森に生きる」の激励に訪れた学長。自らも 3 本の木を伐り倒し、その後は宿舎で学生達とともに夕食を楽しんだ（「森に生きる」の記事は 2 ページから）。

ティアハイム訪問記
浅川千尋 十頁

「見物人」の悲哀
小田 健 八頁

「向日葵と雨傘と盾」から一年
山本和行 七頁

2016 年の「森に生きる」を、毎年参加してくれている総合教育研究センター事務助手の杉本めぐみさんに総括してもらいました。原文はこの 2 倍ほどありましたが、紙面の都合上短縮して掲載します。

備忘録：私の「森に生きる」

杉本　めぐみ（総合教育研究センター　事務助手）

私は今まで 4 回「森に生きる」に携わってきた。事前研修から実習が終わるまでの事を色々振り返って、備忘録を書いてみようと思いペンを執ってみた。

「森に生きる」は単位がもらえる授業です。

8 月の実習までに 3 回の事前研修が行われる。第 1 回はこの授業の趣旨について、また具体的な内容について伊藤先生から話を聴く。第 1 回目研修の準備でまず最初にする事は、登録学生へ「第 1 回事前研修のお知らせ」を郵送すること。

第 2 回では、奈良県森林整備課の職員の方から奈良県の林業や森林の現状、森林の働きなどについての講演を聴く。第 2 回目の研修の準備としては、県庁森林整備課へ講演の依頼をすること。県の HP「県庁手前トーク」のページから、希望する講演内容を選び申し込む。県

三井　彩加（韓国・朝鮮語専攻 3 年）

森林と聞くとただ単に「木」というイメージしかありませんでした。森林というのは、木だけではなく森にいる生物、その気候などそこにあるすべてのものをまとめて「森林」と言うことを聞いて、山や森林について全然知らなかったんだなと思いました。私が住んでいるところの周りには山が多いのですが、自然に近い環境で暮らしている気持ちがあるだけで、そこまで深く考えたことはありませんでした。今回の講義で、森林について考えなければいけないと思いました。私が考えていたより木が生み出す利点が多いことにも驚きました。土が川に流れるのを抑える役目があり、そのおかげで水害を減らすことができるということを知って、木は私たちの命も救ってくれる大切なものだと知りました。

（第 2 回事前研修感想）

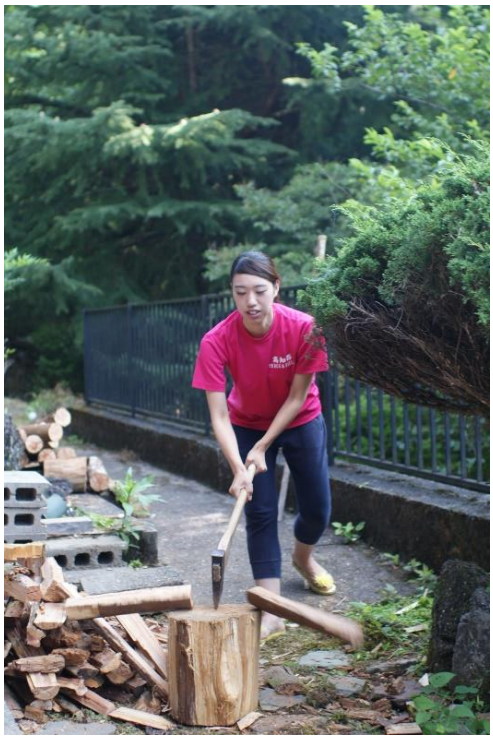
の職員といえばスーツ姿でお堅いイメージがあるけど、講演してくれた F 氏は作業着姿で親しみやすく、また話の内容も簡潔で分かりやすかった。

第 3 回では、実習の際使用する宿舎や実習林の所有者であり、間伐作業の指導員である水本さんの話を聴く。第 3 回目も準備としては、水本さんへの連絡。早め早めにする事。そして連絡はメールより電話の方が確実。

3回目の研修後から実習当日までの約1ヶ月間、学生からいろんな問い合わせがある。初めて参加する学生にとっては心配な事も多いはず。生真面目な人なら尚のこと。そういった学生には前年の様子を写真や動画でまとめた映像資料を観てもらったり、詳しくどんな事をするのかを話して具体的なイメージを持ってもらうようにしてる。こんな時、実際に参加していてよかったなぁと実感する。

実習当日の 8 月 6 日、学生たちは今までの事前研修で 3 回は顔合わせをしていたはずなのに、まるで初対面の様によそよそしくバスに乗り込んでいく。ここでムードメーカーになる学生がいると、みんなすぐに打ち解けていくのだけど、なかなかそううまくはいかないねぇ。その頃の私といえば、3回顔合わせしてるはずの学生の、名前と顔を一致させるのに必死になってる状態・・・・。

さぁ、いよいよ“森に生きる”が始まるよ。



川上村に着いたらまず大仕事。駐車場から階段を上り、80 メートル先の宿舎（水本さんのお宅）へ食材などの荷物を運ぶ。これが最初の共同作業！！ここでみんながなんとなく一つになり始める。体力のある学生は重い物を運び、そうでない学生は軽い物を何度も往復して運ぶ。誰が指示するわけでなく、その作業を進めていく。

ここではみんなが協力しなければ生活できない。お米を炊く、お茶を沸かす、お風呂を焚く、それら全てには薪が必要。その薪を割る人、おくどさん（かまど）やお風呂に薪で火をつける人、お風呂を薪で沸かし続ける人、食事を作る人、部屋を片付ける人。とにかくみんながそれぞれ仕事を見つけて働

かないと何も始まらない。まずはリピーターや教員がどうするのかを見せて、初めての学生は見よう見まねで仕事をしていくようになっていく。私は主に食事を担当し、仲先生は薪割りや炊事、伊藤先生はオールマイティーにいろんな事をしてくれる。そこに学生が加わり協力しあって日々の生活を送っていけるようにする。

朝と晩、料理をするのに台所で立っていると、いろんな学生が「何をしたらいいですか？」と必ず寄ってくる。そうなると、“森のお料理教室”が始まる。野菜の皮の剥き方、切り方、味付けの基本なんかを教えながら色んな料理を作っていく。とにかく量が多いので時間がかかる。手を動かしつつ、いろんな話しをしながら料理をする。この時間はほんとに楽しい。ふだん料理をしてない子たちも不慣れな手つきで一生懸命料理をしてくれる。ここでの料理は、台所の下準備チーム、母屋と離れの間にあるおくどさんでお米を炊き大鍋で煮炊きするチーム、玄関外のカセットコンロで具材を炒めるチームに分かれての作業になる。この離れた場所での作業もみんなの協力で毎回うまく連携できてる。だから、出来上がった料理はさいこーにおいしい。

森に生きるの夜は長い。

食後、誰ともなく食器の後片付けが始まり、その後はうだうだと酒を飲んだり、トランプなどのゲームをしたり、お風呂の釜焚きをしたり、洗濯をしたりしながらゆっくりと時間を過ごす。植林された森の中なので空は広くはないけど、天の川が見えるほど星がいっぱい見える。初めて流れ星を見て感動しまくる子もいる。周りには誰も住んでいないので本当に真っ暗。そんな暗がりで怪談もしたし、もちろん花火も。

お風呂は順番に入っていくので、必ず誰かが薪をくべて燃やし続ける。けっこう熱いし、油断するとお風呂が水風呂になってしまうので、案外気が抜けない仕事。夜になって気温が下がってくると、狭い場所に 2,3 人横並びに座って薪をくべ、いい感じに暖かいその場所は、悩み事や将来の夢など普段できないような話しをしたくなる、させてしまう空間になる。学生とそんな時間を共有できる“森”の夜はとっても貴重。

森に生きるの朝は静かに始まる。

みんなより少し早く起きて、すごい寝相で寝てるみんなを見ていつも半笑い。そして朝の涼しい空気の中ぼーーーっとするのがとても好き。そして先生たちが起き始めたらコーヒーを淹れて飲んで、さらにぼーーっとする。7 時ころからは朝食と弁当作りが始まる。ここからはノンストップ。寝坊な学生はヨロヨロ、ノロノロしながらなんとか朝食の頃には目を覚ます。朝食を済ませ、片付けと同時進行でお弁当を容器に詰め、お茶も用意して森へ行く準備を整える。そして森へ出発！みんな地下足袋を履き、軍手、ヘルメット、斧（ﾖｷ）、鋸（ﾉｺ）を持って作業現場の実習林へ移動。

いよいよ作業開始！！

その日その日で班ごとに間伐作業をするのか、遊歩道を作るのかを決めて山に入っていく。山の中は歩きにくい。遊歩道や階段がある場所は歩きやすいけど、作業をする場所はかなりな急斜面。足を踏ん張っていないと下へ落ちていきそうな場所ばかり。ここで地下足袋のす

木下友宏（宗教学科４年）

今日は午前中と午後と遊歩道を作りました。何もなかった所に階段を五段くらいつくってめっちゃがんばりました。３人くらいでやってたんですけどみんなと協力してきれいな階段ができてよかったです。手つきも慣れてきたのに森に生きるが最終日だったのが残念です。でも本当にいい経験をさせてもらったなぁと思います。（8 月 9 日の日誌より）

ごさを実感。地下足袋だと地面を足の指でしっかりつかめる。これがスニーカーだと踏ん張りきかなくて、ズルズル滑ってしまうだろうと思う。で、そんな足場の悪い斜面で木を伐るためにヨキを振ったり、ノコを引くのは、平地で同じことをするよりはるかに疲れる。細そうに見える木もいったん伐り始めると、すぐに汗が噴き出してくる。体全体を使っている感覚が伝わってくる。

木を伐る事は危険を伴う作業だけど、木を伐る人と木を倒すためにロープを引っ張る人が、力と呼吸を合わせて木が倒れた時の達成感、その沸き上がり方がものすごい。今までここにあった木が倒れ、光が入り風が通ってほんとうに気持ちがいい。

遊歩道作りは、どこに道をつくるか、どのように階段をつくるか、地形をよく見て少しずつ道をつなげていく。作業中、土を掘っていくと見たこともない虫が現れることもある。普段なら気持ち悪いと思う光景も、森の中ではサラッと流せてしまう。さすがに触る事はできないし、触らない方がいいと思うので、そっと埋めるなどしてその場をやり過ごす。そんな事もありながら、作業を進めていくと、今まではただの斜面だったところに道や階段ができる。今まで通れなかった場所がみんなが簡単に通れるようになる。

この森の中での作業は体力的にかなりキツイ。体力のある学生はどんどん作業を進め、そうでない学生は体力に合わせてゆっくり進めていく。みんな汗だくになりながらこのキツイ作業をこなしていくわけだけど、この時の学生の表情がほんとうにいい！みんなすごくいい顔をしてる！初めて階段を一段作った学生が「めぐさ～～ん、見て見て！一段できたよ～～！！」と嬉しそうに、ほんとにキラキラした顔で私を呼びに来てくれたあの光景は、たぶんこの先ずーっと忘れられない。「森に生きる」の素晴らしいところは、学生のものすごい達成感を共有できる事と、その成長をその場で実感できる事だと私は思う。たった 5 日間で。

この 5 日間、出発するまでは長いように感じるけど、実際はあっと言う間に過ぎてしまう。ある学生が「実習が始まるまで実は憂鬱だったけど、来てみたらめっちゃ楽しい！」と言っていた。実のところ私も毎回同じような思いをしている。準備は細々とあるし（いや、それが仕事なんだけど・・・）、怪我人、病人を出さないように気は使うし、自分自身の体調、子供たちの体調も整えておかないといけなし、面倒くさいな・・・と。でも実習が始まるとやっぱり楽しい。めっちゃ楽しい。

森に生きる最後の定番は BBQ と流しそうめん。

８月９日作業最終日の夕方、里からいいお肉が届く。これが本当に旨い。縁側の前に炭床を作って、それをみんなで囲んで BBQ。やったぁこれで終わりだあ、お疲れ様！という気持ちと、あぁ今夜で最後かぁという気持ちが入り交ざりながらの乾杯。まあ、どっちにしても美味しくお肉をいただくけど。

そして最終日 8 月 10 日の朝は流しそうめん。ここで使う竹は、実習に入る前に私と伊藤先生と G Square にたむろしている学生が居ればその学生にも手伝ってもらい、大学近くに生えている竹を伐って、ワッセワッセと南棟地下 2 階、総合教育研究センター作業室へ運び、そこで割って、節を抜いて現地に持ち込んだ物。以前は現地調達できていたけれど、川上村にも鹿が増えて、その鹿たちが竹を喰い荒らしたせいで使える竹がなくなってきたので、天理で調達するようになった。本物の竹を使っての流しそうめんなんて普段はなかなかできない。やってみると、そうめんをキャッチするよりも流す方が意外と難しい。さあ、流しそうめんの後は一斉に片付け。持ってきた物は車に積み込み、宿舎に元々あった物はきれいに整えてしまう。次の年の人たちが気持ちよく使えるように。

施設見学をしてから大学へ。帰りのバスではほどんどの人が爆睡。疲れがどっと出るんだろうね。そして研究棟前で解散～。ここで「森に生きる」が終わる。けれど私の「森に生きる」はまだ終わらない。私には後始末がまっている・・・。

一番大変なのは、写真と動画の整理。カメラ係の学生が撮ったそれらをチェックして、資料動画として使えるように編集する。写真は大量でも見ていられる。けど、素人が撮った大量の動画はつらい。酔う。フラフラになる。一度には観られないので、他の仕事の合間に少しずつ見て、使える部分をつないで、人さまに見せられる資料にする。この作業、いつも年度末が近づく頃にやっと終わる。今年はせめて年内にきっちり仕上げたい。いや仕上げるぞ！！

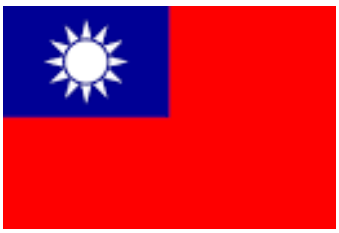
「森に生きる」で一緒に過ごした学生たちとはその後ゆっくり会う機会はあまりない。でも学内で出会えばあいさつを交わしたり、近況を話してくれたり、G Square に顔を見せにきてくれたりする。こうしていろんな学部学科や他大学の学生と知り合える事は、私にとって、とっても嬉しい事。卒業しても時々会ったり、SNS でつながったりで、彼らは私にいろんな刺激を与えてくれている。「森に生きる」で成長するのは学生だけでなく、私もなのです。

おわり

「向日葵と雨傘と盾」から１年

山本　和行（総合教育研究センター　教職課程）

今年 1 月、台湾のリーダーを選ぶ総統選挙がおこなわれ、新しい総統に民主進歩党（民進党）の蔡英文さんが選ばれました。台湾で初めての女性総統となった蔡さんは、3 年前に実施された総統選挙にも出馬していましたが、現職候補に大差で敗れるという経験をしています。

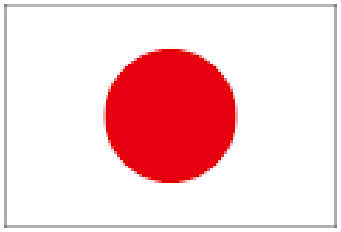


この 3 年のあいだに、台湾で何があったのでしょうか。この間の歴史的な「ターニングポイント」として挙げられるのが、2014 年 3 月に展開された「ひまわり学生運動（太陽花學運）」でした。この運動については『CRADLE』第 5 号に少し書きましたが、この運動以降、政権与党であった国民党に対抗するグループへの期待が人々のあいだに高まっていきました。総統選挙と同時におこなわれた立法院議員選挙（日本の国会議員選挙に相当）では、民進党は結党以来はじめて、過半数を超える議席を獲得しました。また、若い世代の人々が結成した新政党「時代力量」も、旧来からあるその他の野党を超える複数の議席を獲得し、学生運動の「時代性」を政治へと反映する役割を担うこととなりました。

台湾で生まれた「学生運動から政治へ」という流れは、香港でも展開されました。香港では 2014 年 9 月にはじまった「雨傘運動」によって、”Hong Kong First（香港第一）”を掲げる「本土派」と呼ばれる若い人々に注目が集まりました（「雨傘運動」については『CRADLE』第 6 号に書きました）。ここでいう「本土」とは、いわゆる “Mainland” ではありません。香港（や台湾）の人々にとっての “Mainland” は中国大陸と考えてしまいそうですが、そうではなく、むしろ中国大陸に対比する形での香港（や台湾）そのものを、彼ら・彼女らは「本土」と呼んでいます。

そうした香港の「本土派」の人々も、新たな政党を作り、選挙に臨みました。今年 9 月に実施された香港立法会選挙で、「雨傘運動」を主導したリーダーのひとりが中心となって結成した「香港衆志」や、同じく「本土派」の若い人々が結成した「青年新政」などが新たに議席を獲得しました。香港の政治制度上の問題もあって、台湾ほどの劇的な政権交代を実現するには至りませんでしたが、今後の香港の政治状況を語るうえで、無視することのできない存在感を発揮しています。

こうした台湾から香港への流れを受けて、日本の状況はどうでしょうか。1 年前の「安全保障関連法案」に反対する動きを中心的に担った学生グループ「SEALDS」は、今年夏の参議院選挙をもって解散しました。来年にはまた国会議員選挙が行われるのではないかという状況のなかで、昨年夏の「その後」から、どんな動きが出てくるでしょうか。若い世代を中心に、台湾・香港・日本の人々が作る時代の流れを、静かに見ていきたいと思います。



「見物人」の悲哀

小田　健（総合教育研究センター）

「石切神社」という神社のことは皆さんご存じであろう。関西の方言で「でんぼの神様」と呼ばれ、ひろく親しまれ、多くの人々の信仰を集めている。

この際「でんぼ」とは日常用語としては「できもの」、「はれもの」の意であるが、石切神社との関係では、端的に癌を意味する。したがって、身内に癌患者がいる場合など、「お父ちゃんが癌なので、でんぼの神さんとこお参りしてくるわ」などという言葉が出てくるのである。おそらく、「でんぼの神さんとこお参り」するようなケースでは、癌と言っても末期の段階であろう。であるからこそ「でんぼの神さん」にお願いするのである。

今年（平成 28 年）の３月、その石切神社を初めて訪れてみた。そこで私はある種特異な光景を目のあたりにした。それは、十人ほどの、全体として比較的若い男女が、ひたすら前を見据えたまま境内を往復するというものであった。いわゆる、「お百度を踏む」という行為がそれであることに気づくのに、しばらくの時間を要した。私が眼にしたものが、それまでテレビや映画の時代劇で見た「お百度参り」とはやや異質な営為であったからである。彼/彼女らは極めて真剣な、あるいは悲壮と言っていい表情でひたすら「百度石」と呼ばれる円柱状の石と本殿の間を往復する。そして本殿のところで拝礼し、こよりのようなものを一つずつ折って（回数を確認するためである）また百度石に向かう。彼/彼女らの視野には、周囲の事物、たとえば立ち尽くす私などは一切なく、ただただ親あるいはきょうだいの平癒を願って歩を進めるのみであった。

それを眺めている私はどういう存在であったのだろうか。ものの本には、お百度参りは、他人に見られると効験が減じるとある。してみると、「見物人」たる私は、彼/彼女らの営為を妨害するうとましい存在だということになる。私は、あまりの居心地の悪さに早々に神社を立ち去った。

実は、「見物」することの居心地の悪さ、というより一種の罪悪感をもったのはこれが初めてではない。もう 20 年以上前になろうか、あの阪神淡路大地震のときのことである。大学院の恩師の自宅が西宮にあったので、見舞いかたがた地震発生後４日目にその自宅に伺った。幸いにして恩師の自宅は堅固な造りでかつ平屋であったので崩壊は免れた。ただ、地震の威力はすさまじく、家屋が 50 センチから１メートルほどずれたそうである。しかし、周辺の家屋は木造２階建てが多かったため、９割方が１階２階とも押しつぶされ高さが１メートルほどの木片、瓦礫などの堆積物と化していた。今もって忘れることのないすさまじい光景であった。

それから２、３週間ほどたった頃合いだったろうか、私は今度は神戸三宮（その時点では交通機能は相当回復していたように思う）に行った。線路を越え陸橋を渡って南側の方へ行こうとしてふと金網に目をやると、殴り書きの字で「見物人は帰れ！」と書いた紙切れがはり付けてあった。

「そうか、おれは見物人か」

その体験、その際に受けた衝撃は、大仰な表現だが、やはり一種のトラウマと言うべきものであろう。「見物人は帰れ！」。本当にそのとおりだ。見物人はとっとと帰るとしよう。そして二度と来ないようにしよう。

それ以来、神戸に赴くことなく５年ほど経ったろうか、西宮で被災した件の恩師と会食をする機会があったとき、上のような体験をその恩師にし、「もう神戸には行けなくなってしまいました」と愚痴のような口調で喋りかけると、恩師はそれをさえぎって、「それは違いますよ。見物人がいるから神戸は復興出来るんです。見物人がいないと駄目なんですよ」。

「そうか、見物人がいるから神戸は復興出来るのか」

俗に言う、「ものは考え様」のたぐいかも知れない。しかし、私は恩師のその言葉に救われる思いがした。「見物人」にも存在価値があるのだ。

さて、いささかの強弁を試みるならば、お百度参りにおいても、「見物人」の存在によって、「でんぼの神様」の効験が少しでも増すことがありはしないだろうか。もしそうであれば、呆然佇立していた私の存在にも何ほどかの価値があったことになろう。そうであったことを願うのみである。

ハンブルク Tierheim　(動物保護施設) 訪問記

浅川　千尋（総合教育研究センター）

今年も８月９日から９月１日までドイツへ調査研究に出かけてきた。最初の４日間は、涼しかったがその後はドイツにしては暑い日が続いた。気温は、最高気温 28 度から 36 度くらいまでの日々が続いた。マールブルク、フライブルク、ミュンヘンに滞在した後で、ハンブルク（Hamburg）へ飛んだ。ハンブルクでは、動物保護施設（Tierheim＝ティアハイム）を訪問してきた。その訪問の模様を紹介したい。８月 26 日（金）34 度の最高気温を記録した暑い日の午後、ハンブルクで動物保護施設を訪問した。こういう施設は、市の郊外にあり、交通手段が限られている。とても暑かったので、ハンブルク中央駅からタクシーで施設に向かった。およそ、15 分でハンブルク動物保護同盟（このなかに動物保護施設も併設されている）の前に着いた。前もって、メールで訪問日時や質問内容等をやりとりしていたので受付で日本から来た旨を告げると、「担当者には、いつでも連絡が取れますのでまずは施設を見学して来て下さい」といわれた。

この Tierheim（ティアハイム）には、「犬ハウス」、「猫ハウス」、「鳥・小動物ハウス（ウサギやハムスターなど）」という主要な建物があった。それぞれのハウスには、「病院や手術室」が備え付けられていた。2016 年 7 月 19 日現在で、犬 139 頭、猫 266 匹、小動物やそのほかの動物 981 頭・匹・羽（合計 1,383 個体の動物）が、この施設で保護されている。

ハンブルク Tierheim＝ティアハイムの建物全容

鳥の姿も見えた。ドイツの Tierheim（ティアハイム）は、ドイツ動物保護同盟の傘下にある。ハンブルク動物保護同盟は、1841 年創設の歴史がある動物保護団体である。

１時間くらい施設を見学してから、受付に戻り、広報担当の Sven Fraaß（スヴェン・フラス）氏にインタビューすることになった。190ｃｍ以上もあるかと思えるほど背が高い男性であった。部屋に通され、彼が出してくれたガス入りのミネラルウォーターを飲みながらインタビューした。事前に質問内容は、メールで送っていたので、彼は、質問の順番に関係なく話し出した。事前提出していた質問内容は、以下のことである。

「日本では、年間 12 万（公式発表）の犬や猫が殺処分されている。最近は、ペットブームで犬や猫を飼っている人間が増えているが、その一方で捨てられる犬や猫も多い。また、ほとんど殺処分されてしまう。捨てられる原因は、様々なものがある。たとえば、震災などで飼えなくなった例もあるが、主要な原因は、財政的な問題である。また、ドイツのような Tierheim はほとんどないので、引き取り手のない犬や猫は殺処分されてしまう。

１．　ハンブルクの Tierheim では、年間どれくらいの動物を保護しているのか？

２．　保護した動物のうちどれくらいに新たな飼い主が見つかるのか？

３．　Tierheim では、動物保護をするにあたって財政的な問題はないのか？

４．　日本で「殺処分」をなくしていくためには、どのような取り組みが必要かなにかアドバイスをしてほしい」。

彼の回答は、以下のものであった。財政問題から話が切り出された。

「ハンブルクの Tierheim では、年間１億７千万円～２億円（１ユーロ 115 円で計算）くらいの予算がある。動物の食事代、光熱費、世話代、治療・手術代、動物保護をするための費用、宣伝費、施設維持費等で消えている。原則、民間施設という位置づけであり、会員の会費、市民・企業等からの寄付、死亡した市民の遺産の贈与、イベント収入などで賄っている。一部、ハンブルク市などの行政からの援助もある。この援助は、ケースバイケースで予算が足りない時に支援してもらうという形のようなものであると考えていただきたい。年間平均して全予算の 30％ほどが行政からの援助である。ただし、再度確認しておきたいが、Tierheim は、あくまでも原則民間施設であるということである。いまのところ、財政問題は生じていないが、たとえば「野生動物保護」という課題にも取り組もうということになると光熱費や維持費が高額になるので財政問題が生じる可能性がある。そのため、野生動物はずっと保護しておくことができない。

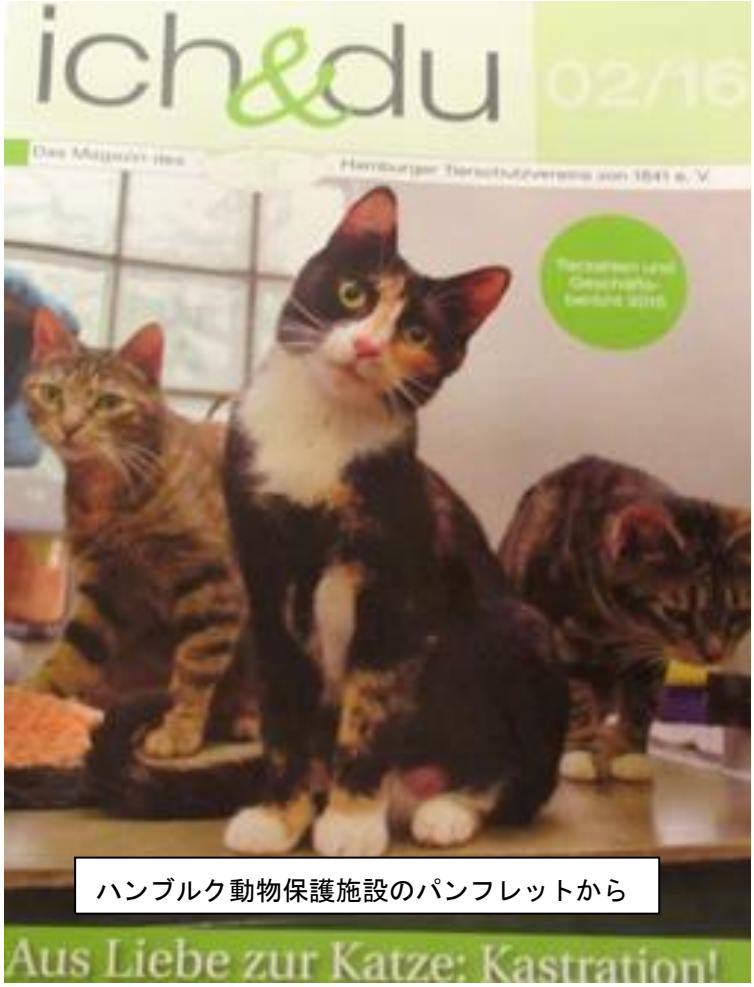
ここで保護されている動物のほとんどすべてに新たな飼い主が見つかっている。ただし、たとえば重い病気に罹っている動物や過去に虐待にあって人間に不信感を抱いていて攻撃的で人間と生活するのが難しい動物には、飼い主が見つかりにくい。そういう動物を含めても、90～95％に新たな飼い主が見つかっている。驚かれているようであるが、ドイツの Tierheim では普通のことである。

日本でも、「殺処分をなくそうという取り組み」が始まっているようであるが、やはり動物保護に関する啓蒙活動、動物保護団体の宣伝活動、政治家・メディアなどを巻き込んだ取り組みが重要である。市民が動物保護というものがどれだけ重要かを意識できるような活動

を展開していくことが大切である。ドイツでも、動物ではなく「子ども、病人、ホームレス、難民」へお金を使うべきだという声も一部ではあるが、動物保護は、なにも一面的に「動物だけを保護する」ことを目指しているわけではない。動物保護と人間の保護とは矛盾しない。動物も人間も保護される社会が重要なのだという意識を高めていくことが必要である」。

ここで、話題がドイツの食生活の問題点に及んだ。「ドイツでは、確かに動物保護は進んでいるが、一方で畜産動物については、まだ取り組みが遅れている。豚肉や牛肉の消費量はかなり多く、その分野での動物保護を強化していくのが課題の１つになっている。肉は安いので多くのドイツ人は大量の肉を消費している。食生活・食文化も変えていかねばならない。できるだけ肉を食べないあるいは肉の消費をできるだけ少なくする方向へ変えていくべきである。近年では、ビオ食品も普及してきている。ベジタリアン・ヴィーガン料理も普及しだしている」。

約 30 分のインタビューであったが、広報担当者の動物保護に対する熱意が伝わってくる内容であった。彼は、大学で「生物学」を学び、「Bundeswehr（徴兵制度）」にはいかず「Zivildienst(非軍事役務活動)」を行い、その後動物保護の活動をして現在に至っている（註）。この点からしても、彼が人間・動物の生命の大切さをずっと考えて生きてきているという一面を見て取れるであろう。動物保護施設訪問は、非常に有意義なものであった。日本での動物保護にもヒントを与えてくれる内容がいくつかある。うまくいけば来年度に、「動物保護と法」というテーマで著書を執筆できる予定である。



ハンブルク動物保護施設のパンフレットから

註　ドイツでは、2011 年７月から徴兵制度が停止されている。徴兵制も非軍事役務活動も志願制になっている。

CRADLE（クレードル）　第 10 号　2016 年 10 月発行

発行者　伊藤義之　天理大学　人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050　電話・FAX　0743-63-7092　（内線）6111